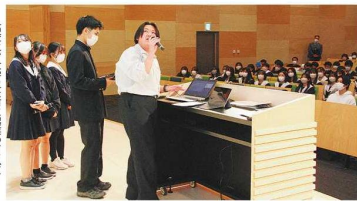


### キャリア教育 探る内容充実

変化の大きな時代に、子どもが自らの人生を切り開く力を育むため、学習指導要領では小学校からのキャリア教育の充実を求めている。ただ、学校現場だけでは対応に限りがあるため、専門家は「校外の資源を活用して」と促す。企業などとのキャリア教育プログラムで鍛えられた大学生が高校生に助言する、高大連携型の起業家教育の現場取材した。(白井春菜)

### 愛知・天白高 愛知大と連携



愛知大の大学生が、天白高のキャリア教育プログラムで鍛えられた大学生が高校生に助言する。愛知大の名古屋キャンパスで。

## 大学生の「実地指導」効果



企業向けのプレゼンを高校生のために実演する大学生

二月、名古屋市中村区の愛知大名古屋キャンパス、六百人収容できるホールに愛知大と天白高の生徒が立った。「好きなアートのアプリ」が取れなかった。そんな時は「このアプリ」。作りたいアプリのデモ動画をスマホのスクリーンに映し、機能や収益性をよく説明した。愛大が協力して二〇二三年度初めて行った、起業教育の成果発表会だ。

「総合的な探究の時間」の授業の一環で、一年生全三百六十人が「IT・ネットサービス」「飲食・食品」など希望の業種に応じて六十一班に分かれ、起業家を模した。愛大の一年生向けキャリア教育プログラムに参加している有志の学生十五人が、三月に計三回天白高を訪れ、企業や自治体の課題解決を手伝った経験から資料作成や発表のついでを伝えた。

愛大一年の小林珠希さんは「プレゼンの際、資料の文字数が多すぎるとメッセージが伝わらない」と話す。収益性を示す必要性などを助言した。一方で「高

校生は想像力が豊かで、タブレット端末での資料作成も上手だった」と話す。発表会でマイクを握った天白高二年の佐藤大雅さんは、準備の段階で学生から「発表はポイントを絞るといい」と助言を受け、伝わりやすさを意識した簡潔な原稿を用意した。一冊目の見やすさを資料の作り方も教わり、参考になった。

小林さんらは企業向けの事業提案を高校生向けにアレンジして発表会で実演した。発表会後のアンケートでは、回答した生徒二百六十五人の96.6%が「愛大生の授業を一大発見」と答えた。

### 「総合」の授業を活用

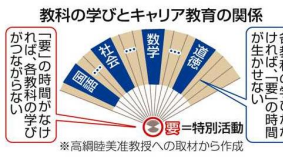
天白高二年生の「総合」の授業でも、全三百六十人が四人一組で国連の持続可能な開発目標(SDGs)からテーマを一つ選び、二年生と同じく愛大生の助言を得ながら課題解決の方法を話し合っていた。発表会では、社会問題の現状を伝えるデータ集め方や、異なる意見の調整などグループ学習を円滑に進める方法を教わった。

新型コロナウイルス禍で外部との交流が制限される中、高大連携を模索していた双方の教職員が情報交換し実現した今回の試み。

「総合」の授業は、「いま求められていることを立てて、深める」という探究的な思考のサイクルだが、教員も多くは学生時代にそんな教育を受けていない」と、大学や企業との連携を重視する。「社会のために将来重視できるのか。生徒が校外の人にも伝わるように言語化する機会を本年度もつくりたい」と話す。(生徒、学生の学年は二月時点のもの)

### 教員の弱点 サポート

### 教科の学習意欲 向上にも



高岡陸美 愛知大准教授

キャリア教育に詳しい愛知大の高岡陸美准教授は、国が力を入れる背景には、社会の変化の速さと、日本の子どもの自己肯定感の低さへの懸念があると説明する。学力の一要素「学びに向かう姿勢」にも関係するといいい、「身に付けた力を意識することで学習意欲が高まる。教科指導にも効果的」と話す。近年、小学校教員から「キャリア教育で何をしたらいい

か」との相談が増えたという。高岡さんは「キャリア教育は職に就くための学びだと思われがちだが、自分らしく人生を送る力を付けるもの」と強調。職場でも求められる、協力して課題に取り組む力は「発達に応じて少しずつ育まれる。授業で考えを深め、学んだことを行事や学級会などの特別活動で意味付ける経験が練習になる。そして、各教科で学んだ内容を結び付ける『要と

なるのは特別活動の時間』と話す。ただ、教科の授業も特別活動も校内だけでは限りがあるため、企業や大学などに協力を求めることも提案する。職場体験では「働く大人のリアルを感じてほしい。興味のない業種を経験するのもいい。希望した仕事では働いてほしい。そんな話を聞くことが将来像を描くきっかけになるという。